

大通公園を望む窓辺から

年越しと初詣

常任理事 目黒 順一

コロナのせいで生まれて初めての経験をさせられた。これまで、実家（滝川市）以外で年越しと初詣をしたことがなかった。いつも年前（としまえ）に帰省し、高齢（現在満98歳）だが元気な母や兄達と一緒に年越しと初詣をしてきた。しかし、今年は帰省を断念した。母も理解してくれた（ごめんなさい）。1994年に建てた今の自宅（白石区）で初めて夫婦二人水入らずの年越しをした。日本酒好きの母の元にも届けた「十四代」を飲みながら「ゆく年くる年」の鐘を聞いて新年を迎えた。早速、実家と息子に電話を架けて新年の挨拶を交わした（息子も市立札幌病院勤務で家に近寄らない）。なぜか不思議な感慨を抱き新鮮であった。初めてのシチュエーションだからか。その後もチビチビやっていると、妻が「初詣に行きましょう」と言い出した。滝川神社しか行ったことがないので、二つ返事で行くことにした。外は新年の静謐さに包まれ、しかも気温がマイナス13℃ほどで風もなく、空気がぴーンと張り詰め、厳かささえ感じられる夜であった。大谷地神社はサイクリング道路の「虹の橋」を通過して15分くらいの距離にあった。この時、寂しくなった頭の保温にと、私が10数年前にカナダで購入したものの、失念していた毛皮の帽子を妻が見つめてくれて大いに助かった。神社はご多分に漏れず若者がほとんどで30名ほどが参拝していた。しかし皆さん行儀がよろしかった。参拝して御神籤やお守り、破魔矢などをいただいた。私の御神籤は大吉であった。たかだか往復40分程度の小旅行であったが、楽しくも気の引き締まる時間であった。

後日、年賀状の中に、40年以上やり取りのある北大ドイツ語研究会の先輩（S博士、元北大低温科学研究所）からの厚い封書が届いた。そこには彼のカナダ留学時代の旅行記や最近の渡航記が収められていた。彼もこの時代に渡航できないもどかしさを感じているのだろうか。自分も滞在したことのあるモンリオールからケベックなどに至る記述を読みながら、元旦の寒空から私の頭を守ったカナダ製の帽子を眺めて、コロナによる人付き合いの変化も前向きに捉えねばとも思った。

新型コロナウイルス感染症と上久保理論

理事 阿久津光之

令和3年1月10日現在、新型コロナウイルス感染者数は日本において273,154人（1万人当たり21.5人）です。一方アメリカに目を転じると1万人当たり668.2人で日本の31倍の発生者数となり、同様にヨーロッパ諸国との比較でもイギリスでは20.2倍、フランス19.7倍、イタリア17.1倍、ドイツ10.5倍と大きな隔たりが見て取れます。次に死亡者数は1月10日現在、日本では3,932人（1万人当たり0.31人）ですが、これもアメリカでは11.3人で日本の36.3倍、イギリスでは37.9倍、フランス33.5倍、イタリア41.2倍、ドイツ15.5倍となり、同じウイルス感染とは思われない結果が見て取れます。

この説明の一つとして京都大学特定教授の上久保靖彦先生が日本における獲得免疫説を唱えられ、YouTubeで配信され年の暮れに興味深く拝聴させていただきました。

日本ではインフルエンザの定点観測が広く行われており、その疫学的調査にて2019年12月から2020年2月における発生状況から見て2019年12月初めと2020年1月中頃にウイルス干渉による変動が認められ、12月にS型のコロナウイルスが日本に入り2020年1月にK型のコロナウイルスが中国から入っていたことで6割近い日本人がT細胞型の免疫を獲得していた結果、武漢型コロナウイルスの感染率や死亡率の低さに関与しているのではと推論されております。その一方でアメリカやヨーロッパではS型のコロナウイルス流入はありましたが、中国との往来を1月に止めた結果、K型のコロナウイルスが流入せず、武漢型コロナウイルスが流入した際にADE（抗体依存性感染増強）が起きた結果、感染者数や死亡数が増えたものと推論されております。

さて、現在我が国では感染者が増加し緊急事態宣言が出ている状況で人の動きが止まろうとしております。免疫学的にはウイルスに暴露することで獲得した免疫力を高めるとも言われておりますが、現在のように人の動きを止めることが逆効果とも思われるこの理論の真実性は如何なものかと想像する年末年始のある一日でした。

